

問題提起

教研会議と信行会活動

小倉 光雄

(長野・円乗寺住職)

今回の会議で問題提起をいたすことになりました。思いつくままを申しあげ、後の分散会での資料の一つとしていただければ幸に存じます。

この教研会議も、布教経験交流の場として、それぞれの体験を語り合い、お互いに取り入れるものを取り入れていく、参考にしていく、という形で開催され、ここに十七回目をむかえました。四年前、第十二回七百遠忌身延結集におきまして、過去の話し合いの総括というか、重要ポイント抽出という形で懸案の部会制が確立いたしました。すなわち (一) 教学部会、(二) 寺壇部会、(三) 法器養成部会、(四) 青少年教化部会、(五) 文書、視聴覚部会、(六) 社

会問題部会、(七) 組織部会の七部会ですが、以後四回この七部会の内容について話し合ってきたわけですが、七〇一年以降の布教方針として、宗門より宗徒総弘通が打ち出されている折りから、各部会とも密接な関係を持ち、しかも、宗徒総弘通、寺院繁栄のかなめとして、誰にもでき、又しなければならぬ活動として、ここに信行会活動の必要性が打ち出されたわけであります。

信行会の重要性

人にはそれぞれ得手不得手、好みというものがありません。現在、宗門内では、各々自由な立場で布教が行われており、そこに幅広い活動がなされております。ですが、自分自身の好みだけでよいのでありましようか。私の近くの寺では、寺院開放の一環なのでしょうが、本堂でジャズダンスを行っている寺があります。又、フォークソングで若い人を集めている寺もあります。それでも布教の一つといえはいるのでしょうか？ 認識不足とおしかりを受けるかもしれません。保育園・幼稚園を

経営している寺で、大義名分はたてていますが、ほとんど営利のために行っている寺がかなりあるのではないのでしょうか。人を集めれば手段はどうでもよい、というやり方に、私は疑問を持ちます。私たちは本化の門下としての自覚、法華経と日蓮聖人の信仰にもとづいた布教をする、という基本をしっかりとおさえておく必要があると思うのです。

ここにおいて、布教は幅広く行われることは必要でありますが、うわつつらでなく、本当に一人一人の心の眼を開かせていく、真の信仰に目覚めさせていく、ということで、信行会活動が最も必要な基本的活動であると思うのであります。

この地道な信行会活動によって、檀家を信徒に、未信徒を信徒に、と導いていくことが大切なわけですが、それはあえて導こうとしなくても、教師自身の信仰は自然に浸透していくものなのです。

私は、松本市の円乗寺という寺の住職をしています。先代もそうだったのですが、特に先々代が大正から昭和

初期にかけての大験者といわれた人で、気違いのお寺と陰口をいわれるほどで、おこもり用の長屋があり、ノイローゼ、医者に見はなされた人たちが、自炊をしながらおこもりをし、毎日朝から晩まで本堂でお題目を唱えたり治った人も多くおられたわけで、そうした大験者の薫陶を受けた人が多くおりますので、やはり俗にいうタク談が非常に好きです。

最近ではテレビでよく霊能者が出ますので、そうした話になると、夢中になって話し合っております。なるほど薫陶を受けるということは教師の信仰そのものを受けつぐということなのだなあ、とつくづく思います。先ほど、信行会活動が部会制と密接な関係があると申しあげましたのは、ここなんです。教師の信仰ですから、教師が青少年教化に意欲をもっていれば、信徒もそのようになるし、社会問題に興味を持っていれば、信徒も社会問題に積極的に取り組むようになるのであります。

よく、子供の姿は親の鏡にうつった姿、といわれますが、まさに信徒の姿も教師の鏡にうつった姿、ということこ

とになると思います。したがって、信行会のマンネリ化ということがいわれておりますが、これはとりもなおさず、教師自身の信仰の停滞にあるということを知りておかなければなりません。

このように信行会活動は、内的には信徒の信仰の確立を進めていくと共に、一方、外的には、未信徒を信徒にという地域社会を包含していくという重要な役割を持っております。

本年三月中部教研が開かれましたが、発題者となった長谷川正浩師が、ある高名な大学教授の発言を引用して次のような主張を致しました。その教授は、宗教法人には好意的な人なのですが、こと税務問題に関しては非常にきびしいことをいわれている。それは「寺院には公共性がない。寺院は檀家にとつて必要であるが、檀家外の人たちには必要性を感じない。いわゆる、地域にとつては必要性がない、だから公共性がない、ということなのです。よって、寺院はもっと公共性をもたなければならぬ、地域に役立つ寺院にならなければならない」とい

うことをいわれました。

これを受けて、寺院開放の必要性を叫ばれた人もおりましたが、私は、先ほど申しあげました通り、寺院開放もただ開放すればよい、お寺に人が集まればよい、というものではないと思う。

そこで最も必要な事は、理想論といわれるでしょうが、地域全体を信徒にしていこうかと思うのです。地方にいくと、一集落そっくり檀家というお寺がありますが、信行会の輪をひろげていって地域全体を信徒化していく。そこにこそ、宗徒総弘通への第一歩があるといえるのではないのでしょうか。

宗内の現状

そこで、宗門の現状はどうか、というと、昭和五十五年に行われた宗勢調査によりますと、信行会が三十三パーセント、題目講が四十パーセントという数字がでております。両方合せると七十三パーセント、この中には一カ寺で両方行っている寺もあります、無住もあります

信行会・題目講の実施状況(昭和55年宗勢調査より)

	北海道	東北	北関東	千葉	東京	神奈川	静岡	山梨	中部	北陸	関西Ⅰ	関西Ⅱ	中四国	九州
信行会	31	40	45	22	35	35	36	25	33	25	34	42	35	29
題目講	51	62	65	46	24	52	60	43	42	45	25	33	35	55
計	82	102	110	68	59	87	96	68	75	70	59	75	70	84

ので、まあまあの数字だ
と思います。

地域別に見ますと、図
表の通りです。

やはり、東京・大阪と
いう大都会が低調という
結果が出ております。山
梨・千葉は無任が多いの
で、割増しして考えなけ
ればならないと思います。
私は、東京で生れ育ち、
現在、地方におりますの
で、両方の事情がわかり
ますが、都会が低調なの
は、次のような理由があ
ると思います。

(イ) 檀信徒が広範囲に
散在している。

(ロ) 檀信徒同志の横のつながりがうすい。

(ハ) 住職教師との接触が少ない。

(ニ) 菩提寺に対する意識がうすい。

長い間につちかわれた人情的なものがかなりのウエー
トをしめていると思いますが、教師の努力によるという
重要な点も見逃すことはできません。

特に私感じますのは、(ハ)(ニ)の教師と檀信徒との接触
の問題です。地方では、月回向がさかんに行われており
ますし、又、法事も自宅で行う場合が多く、当然、会食
も共にしますので、施主だけでなく、分家・親戚とのコ
ミュニケーションが良くなります。その点、東京では、
月回向はしない、法事もお寺でお経だけ、ということ
で接触が非常に少ない。こうした人間関係の多少が信行会
活動をはじめとして寺院の興亡に大きく影響すると思
います。

このような地域的な問題もありますが、総じていえば、
これからの分散会で話し合われることですが、全体的に
マンネリ化の傾向が強いと思います。

七百遠忌を機に、特派布教が行われてまいりましたが、形の上だけでは盛大に行われておりますが、実質上はほとんど成果があがっておりません。このへんに信仰上の低迷をうかがい知ることができません。

現状打破

(イ) 時代即応の工夫

そこでその打開策ですが、教研会議でもよく話し合われてきたことですが、まず時代に即した工夫が必要ではないでしょうか。

家庭生活の実状が、核家族、サラリーマン化、共かせぎという方向に進んでおり、今後もその傾向はますます強くなっていくことでしょう。その点を考慮し、開催日時など工夫する必要があると思います。

私の寺では、一日・十五日の夜に行っておりますが、日曜の昼に変更した方がよいかな、と考えております。

(ロ) 教師の自覚

創意工夫をもって条件を良くするということは、今申

しあげました通り必要な事ではありますが、それはあくまでも外的なものであつて、本筋とするところは、教師の信仰の問題です。どこでもそうだと思いますが、最近、早起き野球、ゲートボールが大変さかんに行われております。参加する人たちは、それぞれ朝四時、五時に起きて、会社に行く前に練習、試合をしております。意欲を持てばそれだけのことができるのです。こういう点を見ると、信行会のマンネリ化ということは、とりもなおさず教師自身の信仰停滞にあるということを指摘せざるを得ません。先ほど教師の信仰がそのまま信徒の信仰だと申し上げましたが、信徒の不信心は教師自身の不信心なのです。そこでいつもいわれている言葉になってしましますが、最後は、やはり教師の自覚ということになってしまいます。

ただ私は、それが単なる言葉の上だけでなく、実感として感じております。こうして教研会議に参加して多くの人に接しまして、活発に動いているところは、やはりみんな熱心な人たちばかりです。たて前だけでなく、本

音として教師の自覚の重要性を重ねて力説致したいと存じます。

Ⅱ 切磋琢磨——相互交流

自覚を深めるためには、たゆまぬ努力が必要なのですが、私自身をふり返ってみても、一人で持続することというのはなかなかむずかしいことです。

今年の教化学集会で、茂田井先生が堀の内を退山されて八王子に戻られるについて、「今度こそは早朝に起きて朝勤にはげむぞ、もしそれができなかつたら私はダメだ。今までに何度も心に誓って挫折してきた」というお話を聞いて、茂田井先生ほどの人でもそうかなあ、と思います。一人で努力することは、ほんとうにむずかしいことです。

その意味では、良い意味でのライバルが必要です。私は、東京にいたころは、活動部門では持田貫宣上人がおりましたし、布教部門では菅野啓淳上人がおりました。彼らに負けまいとすることが、努力としてつながっておりました。長野に行つてそういう人がそばにおりません。

やはりダメですね。それで、こうして刺激を求めて教研会議にやつてくるのです。ここへ来ると刺激されます。みんなよくやつておられますので「やらにゃいかんあ」ということを、いつも思いながら帰るんです。こうした刺激のし合い、さらに進んで相互交流ということが必要だと思います。

寺院とのかかり合い

信行会が寺院のなかでどういう形で組織されているかという点、ほとんどの寺院が有志の集まりということになろうかと思えます。

私は十年前に松本の円乗寺に入寺致しました。円乗寺には円融会という信行会がありまして、七十名ほどの会員がおりましたが、私が入寺する間、二、三年のプランクがありましたので、ほとんど解散状態でありました。私が入寺致しました時、この円融会を復興させては、という会員の声がありました。そんな有志だけの会ではだめだ、檀信徒全員を網羅する組織にしなければ、と

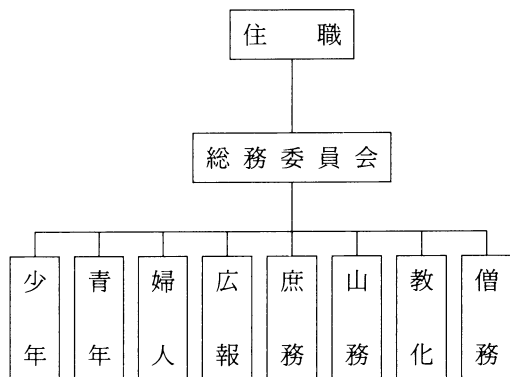
いうことで護持会を結成し、全員を信行会員という形をとろうとしたのですが、見事に失敗致しました。

信行会員という名目があるから会員自身も意識を持つし、こちらも強引に出られるのですが、全体に広げてしまいますと、その意識がうすらいでしまいます。

そこで考えるのですが、あたまから全体にひろげようとしたところに無理があった。いわゆる密度がうすくなってしまうわけなんです。したがって一つの組織をひろげるのではなく、会員意識を持たせておく小さな単位細胞を数多くつくり、全員がどこかの組織に参画するという形をとり、お互いに連けいをとらせながら全体としてまとめあげていく、こういう組織体制が良いのではないかと愚考致しております。

その意味で、昨年、体験発表された鎌田行学上人の妙恩寺の仕組みは非常にすばらしいと思います。私自身にはできませんので、人の借り物で誠に申し訳ないのですが、この妙恩寺さんの仕組みをご紹介します。問題提起を終らせていただきたいと存じます。

妙恩寺（鎌田行学上人）の仕組み



信行会体験発表

都 龍 張

(鳥取・学成寺住職)

私の寺は、地方の寺院であって、檀信徒が多く点在しているが、立派な組織も力ありません。現状の立地条件を生かすことを心掛けています。信徒の苦しみ、悩みなどの対応の接点を大事にして、寺という大きな「つぼ」の中に集まれるように心掛け、従って檀信徒以外にも声をかけ、つながりをもつようにしています。

年中行事は一カ月一、二回殊さらに信行会を作って催すというのは大変ですので、年中行事を信行研修方式で行なっています。例えば、自我偽読誦とか、唱題行とか、法華経などを重点的にやるとかの方法をもってやり、時には信行会形式のものもやります。

信行会の名称は、「仏像と語る集い」「写経の集い」など。

信行会の運営、護持会との関係は、昭和の初めから護持会は護持会としてある。

次に教材についてですが、「仏像と語る集い」は『仏像の見方』『仏像具典』『仏像——仏陀シリーズ』などを使う。『写経の集い』で必要なものは寺に置いてある。婦人部では、法話に主にご消息遺文を使い、最近は、話の糸口に草柳大蔵の『女性像』を使用している。その他、時事や新聞・家庭雑誌・婦人画報をテキストにする。ただ問題を私なりのメモとしてプリントするなど、そこが大事と思います。

呼びかけや時間の取り方については、年中行事のほか信行会を、どういうことを、どういう理由でするかを呼びかけ、約二時間の勤行と茶話会も組みこむ。

次に、仲間意識の持たせ方、組織を動かす人材の育成が大事だと思います。具体的には、たてわりでリーダーを選ぶのではなく、住職がその人の個性・力量をふまえて役割り分担が自然にできるように仕向けていく。小さくても案外大きな力を発揮していると思います。

各種の意識調査が発表されていますが、青少年問題、家族崩壊、老後問題、健康の問題など、全般的に豊かさの底に個々の社会環境への不安が高まっている。その中で檀信徒の我々の求め方も多様化しているということ、いろいろな不安からくる檀信徒が寺をより所として、教化者を依師として集まってくる。当然、寺は心の寺となり、コミュニケーションの場となり、教化者は教えの師としての役割を果たさねばならないし、そうしなければ、教化活動は成り立たない。また、推進することも、実績を高めることもできない。

私の場合も、仏像を姿としてだけで話をしていても何の役にも立たないということだと思えます。日蓮聖人が、「仏の経と行者と檀那と三事相応して一事を成ぜん」と明示されたごとく、私も信仰共同体が形成されていくというふうな、共に問題点を語り合っていくという対応の仕方ではなくてはならないと思います。

停滞、マンネリの原因、これは何でもつきものです。例えば、「写経の集い」の場合、庫裡の修理で一カ年休ん

だのですが、現在考えていることは、寺に集まればよいではなく、家庭で各自でできることを検討中です。「仏像と語る集い」は形のあるところから形のない心の問題に入ってきたので、具体性があつてよかったです。団参にいつても、仏像に関心を持ち、単なるお参りだけでなく、内容が充実していてプラスになったと思います。そうした中から、教典のシリーズをとの要望が出たのでよかったです。

最後にまとめとなりますが、昭和五十九年八月二十日付の読売新聞に宗教心についての全国世論調査がのつていました。「繁栄と不安、伝統的な生活習慣と都市化の波が交錯する現代社会で国民の宗教意識と行動様式の複雑な動きを示している」とあつて、宗教は信じないが頼る、心の底に何かあるのではないかということは間違いないことが書いてありました。頼る心を、求める心を、教師はしっかりとつかんで、生き生きとした信行活動を推進するようになる必要があります。

聖人の教えを反復し、画一でなしに、教えを常に新し

く教える。人間形成、社会に貢献しなければならぬと思うが、そのために各個人の活動の在り方、これからどうあるべきかの情報や資料の交換が大事だと思えます。

教団組織においても、生きるセンター作りなどいわれますが、各管区の既存の組織にしても、もつと真面目に真剣に最大の努力を払うべきではなかるうか。もつと突込んで話合うべきだと思います。

信行会体験発表表

小林 栄祥

(茨城・真浄寺副住職)

北関東は笠間市、人口三万人という田園都市の中で、檀家二四〇軒の小さな山寺に住職と二人で専属として住んでいます。副住職としての私の寺の事例、月例行事としての信行会について説明させていただきます。

私の寺は、住職の先代から、明治頃復興が始まり、以前より題目講があつて、太平洋戦争で中断していたが、

昭和二十五年、現在の住職が信行会と改称し、その時護持会を結成したのを機に護持会の会員の信行の集いを行つてきている。月平均四十余名集り、登録会員九十名、時折、信行会のしおりを作り、会費、弔、見舞、又信行会出席時の注意事項、約束ごとを作つて会員の一覧表にしている。

この会は、毎月十二日、二時間半、会費一人五百円、その都度参加者は払う。内容は、勤行一時間、法話三十分、出欠チェックの後、茶話清談する。九月の敬老の日には、七十歳以上に祖品進呈などして会の中のアクセントとしています。

実は私は、昭和四十年に立正大学卒業し、県の社会教育課に六年務めていたが、四十六年に荒行に入行するため辞めて、四十七年行を終えて寺に戻りました。七面堂を道場にして教化活動できれば、ということ、鬼子母神の例祭を毎月十八日午前、御祈禱会を行いはじめました。田舎の寺ですので、日常的に六三除け、交通安全、水子供養、安産祈願、地祭り、虫封じなどを行つており、

私は修法師として、窓口として面談をしたり、祈禱をしたりして方向づけるため、又、次月の十八日にと誘う。そこで、同じ悩みを持った人たちで、お互いのコミュニケーションが図られる、というようなことで行っています。日常生活をまとめる意味で、四十七年から毎月行っている。

内容は、ただ祈禱を受けるだけというのではなく、修行したり、題目をあげたりするなどを、どのようにやった方がいいか、それは十二日の信行会にいらっしやいといっています。かなり高齢化していて、若い人はなじまない部分がある。

通常のなつとめの内容で、それが修行と受けとめることができないう部分があり、そこで五十一年より、今月も元気にやらせていただくための修行をしよう、と毎月一日夜七時から九時半まで座禅唱題の集いを開いています。出席平均十五名、出入りは自由で、常に来る人は七、八名、始めてより延べ人数はかなりの人数で会費制をとっており、内容は唱題行のやり方で行っています。

また、私は九識靈断を勉強しましたので、月初めに靈神符を与えたり、ガリ版で刷ったものを折ると経本になるようにプリントをしたりして使っています。簡単なものを寺で刷るということを心掛けるとよいと思います。座禅唱題の集いを一つの窓口としてコミュニケーションを図って、大信者に導くなどということは未熟な私にはできませんけれども、町の人が真浄寺の信行の集いに足をはこんでくれるというのは、うれしいことだと思っています。

社会の役に立つ寺院活動をしようというのが住職のモットーですので、寺の檀信徒にとどまらず、町の中に足を広げ、寺が笠間にあることが笠間の役に立つというような活動をしようということで、現在、私は信行会を中心に活動をしている次第であります。